

日本人英語学習者の非対格動詞の習得について

齋藤伸治

1. はじめに

Permuter (1978) において提案された非対格性仮説 (Unaccusative Hypothesis) 以降, 自動詞を非対格動詞 (unaccusative verbs) と非能格動詞 (unergative verbs) に区別するという考え方が広く受け入れられている。非能格動詞は, (1 a) にみるように, 大体意味的には意図的に動作を行なう Agent を主語とするのに対して,¹⁾ 非対格動詞は, (1 b) にみるように, 意図ないし意志をもたない他動詞の目的語に相当する要素 Theme などを主語とする。

- (1) a. John worked.
b. The vase broke. (cf. John broke the vase.)
c. The vase was broken.

表面的に (1 a, b) は, 同一の構造をもっているようにみえるが, 非対格性仮説によれば, 非対格動詞は, 基底構造 (D 構造) では他動詞同様に目的語をとっているとされる。つまり, (1 a) の主語 John と異なり, (1 b) の主語 The vase は, 目的語の位置から名詞句移動によって派生された主語と分析され, 要するに非対格構文は, (1 c) の受動文の派生とほぼ同じ統語的操作を経て派生された構造をもつということになる。他動詞の目的語と非対格動詞の主語との間に何らかの共通性がみられると考えるこの非対格仮説に対しては, 例えば, 次のような結果構文に関する事実から 1 つの証拠が得られる (Levin and Rappaport Hovav 1995 など参照)。

- (2) a. John broke the vase into pieces.
b. The vase was broken into pieces.
c. The vase broke into pieces.
d. *John worked exhausted.

(2 a) の into pieces は花瓶をこわした後の結果状態を表す表現 (結果述語) であるが, このような結果述語は, 基底構造の (直接) 目的語のみを叙述すると考えられている。(2 b) の受動文の場合は, 主語 The vase は基底構造では目的語であるため, 結果述語 into pieces によって叙述される。同じことは (2 c) についても当てはまり, 非対格動詞の主語も結果述語 into

1) 但し, 次のような非意図的な身体作用を表す動詞も, 非能格動詞に分類される。

- (i) She sneezed.
(ii) John coughed in his room.

piecesによって叙述することができることから、受動文の主語同様、基底構造では目的語であったことがわかる。(2d)にみるように、非能格動詞の主語の場合は、基底構造においても主語であり、結果述語 exhaustedによって叙述することはできない。このように、非対格動詞の主語は、他動詞の目的語及び受動文の主語と共通の振舞いを示すのであり、非能格動詞の主語とは、性格を異にしているのである。

純粋な自動詞である非能格動詞に対して、非対格動詞は、部分的に他動詞的な特徴を備えた自動詞とすることができるだろう。そして、このように非能格動詞と比べて多少複雑な性格をもつ非対格動詞に関しては、当然、日本人が外国語として英語を学んでいく際にも、非能格動詞の場合にはみられないような、習得が困難な様々な文法上の問題が生じてくるであろうと予想される。その1つとして、ある事態を言語表現化する際、非対格動詞と他動詞の受動態のどちらを用いるべきかという使い分けの問題がある。特に、非対格動詞をどのような場合を選ぶべきかという問題は、日本人の英語学習者にとって、習得が困難な問題の1つのように思われる。一般的に言えば、事態の原因が外部に求められるような状況下では、受動構文を用いるのが適切であろうし、一方、事態の原因が主体の内にあると解釈されるような場合には、非対格構文を用いるのが適切であろう。しかし実際のところ、本来は動詞を非対格動詞として用いるのが適切なはずのところ、日本人英語学習者にとってそれがなかなかうまくできないような事例が数多くあるように思われる。例えば、次の例においては非対格構文が用いられており、実際それが適切なわけであるが、日本人の英語学習者にとってこれらの文の意味内容を受動構文で表現してしまう可能性はかなり高いであろう(千葉 1999 註27を参照。(3a)の例文は千葉1999に引用されていたもの)。

- (3) a. In February last year, the mother tested positively for AIDS and was advised not to become pregnant, according to the officials. [*The Daily Yomiuri* : 1987/08/19: 08]
- b. It was raining hard, and long lines were already forming for taxis. [*The Daily Yomiuri*: 1996/07/14: 06]
- c. "Jinmin" translates into "people" in English, ... [*The Daily Yomiuri*: 1997/02/12: 06]

千葉(1999)でも指摘がなされているように、日本人学習者にとって個々の非対格動詞の適切な使用、受動態との微妙な意味の違いについての正確な言語知識を習得することは、かなり困難な問題の1つと言えるだろう。

第2言語習得研究の分野において、英語を外国語として学ぶ際の非対格動詞の習得過程について扱った研究が、ここ数年数多くみられる(Zolb 1989, Balcom 1997, Hirakawa 1997, 松林 2002など)。そのなかでも、Hirakawa (1997)では、日本人が本来非対格動詞を使うべき箇所に誤って他動詞の受動態を使ってしまうという事例についての興味深い実験結果やそれについての分析が示されている。次節では、第2言語習得論のなかで、日本人英語学習の非対格動詞の習得過程についてどのような分析がなされているかについて、このHirakawa (1997)を中心にみておきたい。

2. Hirakawa (1997) にみる日本人の非対格動詞習得の特徴

日本人が英語を外国語として学習する場合、そこには一体どのような要因が関わっていて、どんな仕組みで習得がなされるのだろうか。この問題を理論的に明らかにしていこうとする第2言語習得研究には、大きく分けて2種類の問題があると考えられる。母語の習得においては、経験データと実際に習得される文法との間に落差があると考えられるが(刺激の貧困の問題,あるいは言語獲得の論理問題),同じようなことが,外国語の習得の場合にも言えるのかどうか。言い換えれば,母語の習得において働いているのと同じメカニズム(普遍文法,UG)が,第2言語習得においても機能しているのかどうかという問題である。これが第1番目の問題である。更に,第2番目の問題として,英語などの外国語,つまり第2言語の習得には,当然母語の習得とは異なる要因が関わっていると考えなければならないが,特に,既に習得してある母語がどのように第2言語の習得に影響を及ぼしてくるのか,という問題がある。この2つの問題の観点から,以下,Hirakawa (1997)を中心に日本人英語学習者の非対格動詞の習得過程についてみていこう。

まず第1番目の問題に関して,Hirakawa (1997)は,日本人の英語学習者の非対格動詞の習得においても,非対格構文と非能格構文を正しく区別しており,英語母語話者の場合と同じように,非対格構文には名詞句移動が含まれているという知識を習得しているのではないかと論じている。両構文は表面的には同じ構造をしているわけであるが,特に明示的な指示を受けることなく,その文法上の違いについて英語母語話者と同じような知識を習得しているというのであれば,そこには何か生得的なUGの原理(例えばUTAH (Baker1988)など)が働いていると考えられるわけである。Hirakawaが挙げている証拠の1つは,次にみるような結果構文を用いた文法性判断テストによるものである。

Hirakawaは,18人の日本人英語学習者(大学生)を対象にして,非能格動詞,非対格動詞,他動詞の習得状況について調査するために,以下のような文法性判断テストを行なっている。

(4) 結果構文を用いての文法性判断テスト

- a. Mary went to a disco and stayed there all night.
 *She danced tired. - 2 - 1 0 1 2
- b. Susan didn't have her hair cut for 6 months.
 Her hair grew long. - 2 - 1 0 1 2
- c. The rope was too long.
 So I cut the rope in two. - 2 - 1 0 1 2

実験の仕方は,被験者にa(非能格動詞を含む結果構文),b(非対格動詞を含む結果構文),c(他動詞を含む結果構文)のそれぞれの文の文法性を-2(完全に容認不可能)から2(完全に容認可)の5段階の範囲で判断してもらうというものである。18人の被験者が下した判断の平均は,aが-0.96(英語母語話者10人の平均は-1.62),bが0.59(英語母語話者10人の平均は1.46),cが0.81(英語母語話者10人の平均は0.82)というものであった。つまり,Hirakawaが述べているように,日本人英語学習者も,ほぼ正しく非対格動詞と非能格動詞とを区別しているということが言えるだろう。そしてそこに,英語母語話者に働いているのと同じようなUG

の原理が働いている可能性は十分にあるだろう。しかしこれだけの実験から、全ての非対格動詞にわたって、日本人英語学習者が英語母語話者とほぼ同じような知識をもっていると言えるかとなると、もちろん話は別である。この問題については、最後のところで、もう一度立ち返ることにする。

次に、第2番目の問題に関して。Hirakawa (1997) では、非対格動詞を用いるのが適切な文脈において、日本人英語学習が誤って非対格動詞を受動化してしまう傾向があるという事実について議論がなされている。Hirakawa は、先の18人の日本人被験者に対して、例えば、以下にみるような誘導的表出タスクに基づいた実験を行なっている。

(5) John was looking out of the window. Because of a typhoon, it was raining heavily, and the wind was blowing the trees. All of a sudden, one of the trees _____ (break)

上の文脈においては、非対格動詞の broke を用いるのが適切であるが、実験結果では、18人中11人の日本人被験者が、誤って非対格動詞を受動化した形 was broken を選んだと Hirakawa は報告している。Hirakawa は、同様の誘導的表出タスクに基づいた実験を、様々なタイプの動詞 (break など他動詞機能も併せ持つ非対格動詞, appear など他動詞機能を持たない非対格動詞, dance などの非能格動詞, build などの他動詞) に対して行ない、次のように結論している (Hirakawa 1997:21-2)。日本人英語学習者が誤って受動化してしまうという現象は、主として他動詞の機能をも併せ持つ非対格動詞にほぼ限られる。具体的に数字を挙げると、18人中 break の場合は11人, freeze の場合は6人, burn の場合は5人, grow の場合は1人に受動化の誤りがみられた (全表出中の26.6%)。それに対して、同じ非対格動詞でも、他動詞の機能を持たない場合には、あまり受動化の誤りはみられない。fall について3人, die についてはわずか1人にだけこの種の誤りがみられた (全表出中の4.4%)²⁾ また、非能格動詞の場合には、laugh に関して18人中1名に受動化の誤りがあったのみであった。

どのような仕組みで非対格動詞に対してこのような誤りが生じるのかについては、この問題を最初に指摘した Zobl (1989) は、中核的規則である受動化規則が非対格動詞にまで過剰一般化されたために生じた誤りではないかと論じている。しかし上の実験結果をみる限り、この非対格動詞の受動化の誤りは、全ての非対格動詞に一律にみられるものではなく、特定のタイプの動詞によく生じているようであり、もっと動詞の意味的・機能的側面が考慮された説明が可能なのではないと思われる。また Hirakawa は、例えば(5)において、日本人の被験者が break を非対格動詞ではなく他動詞として用い、それを受動化してしまう理由として、日本人の被験者がこの事態のなかに何らかの潜在的な行為者を感じている可能性があるとして述べている。しかし、英米人ではなく日本人の方が、こういった事態に対して他動的な解釈をしているのではないかというこの説明は、あまり説得力をもたないように思われる。日本語の傾向として自動表現が好まれるということについては、これまででもいろいろところで既に指摘されていることであるし (例えば金田一2002:79-85など参照)、例えば寺村 (1992:213) では、あるアメリカ人女性の発した「ああいうマンションが最近急にたくさん建てられましたからねえ」という不自然な日本語の例が指摘されている。一般に英米人の方が他動表現を好むというのはよく

2) Hirakawa は、この実験結果は、英語の第2言語習得者が受動化規則を過剰に一般化して非対格動詞に適用しているという Zobl (1989) などで報告されている実験結果とは異なるものであったと指摘している。

言われることであり、日本人なら普通は「建ちました」と自動表現をすることである。また、同様の例として、吉川 (1995) が指摘している次のような事実も興味深い。夏目漱石『坊っちゃん』の日本人による英訳とイギリス人による英訳の比較であるが、原文の自動表現を日本人の訳者は全て自動表現で訳しているのに対して、イギリス人の訳者の方は受動文を用いて表現している。(6)–(8)の a の文が日本人の訳者の英訳、b の文がイギリス人の訳者の英訳である。

- (6) 勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。
- a. The sleeves of my garment went with him when he fell over, and I found my arm free.
- b. As he fell, one of the sleeves of my kimono was torn off and my hand suddenly came free.
- (7) あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら....
- a. I asked the teacher of natural history where that setomono came from....
- b. I asked the natural history teacher where the setomono vase had been made, ...
- (8) 挨拶が済んだら,....
- a. No sooner had the speech making come to an end....
- b. As soon as the speeches were finished, ...

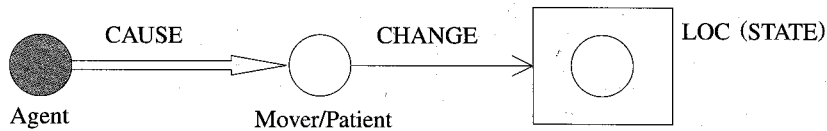
このように、可能であれば自動表現の方が選ばれやすいというのが日本人の言語表現の特性であり、これを考えれば、先の Hirakawa の説明は、あまり説得力をもたないように思われる。もし、(5)において、日本人の被験者が break を非対格動詞ではなく、他動詞と解釈しているとすれば、その理由は別のところに求めなければならないだろう。

3. 非対格動詞とプロトタイプ性

同じ非対格動詞といっても、例えば break と grow は、日本人英語学習者の習得過程において随分異なった振舞いをしているように思われる。前節の(5)にみるような Hirakawa (1997) の誘導的表出タスクでは、break を誤って受動化してしまう例は、18人中11人もいたのに対して、grow の場合には、たった1人だけであった。この事実は、非対格動詞というカテゴリーは、決して均一的なメンバーから構成されているのではなく、メンバー間には典型的なものとは異なるものというように、カテゴリーの帰属度に程度の差があるということを示しているのではないだろうか。認知言語学の視点に立つ谷口 (2005) は、非対格動詞とは非能格動詞とは完全に二分されるものではなく、両者はプロトタイプのカテゴリーをなしており、場合によっては重複し合うこともあり得ると論じている。本節ではまず、この谷口 (2005) の議論をみていきたい。

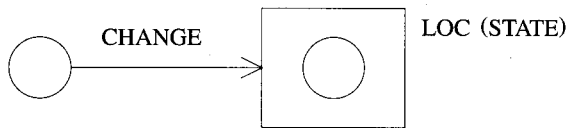
1つの事態は、参与者と参与者間の関係から成立していると考えられるが、認知文法のアクション・チェーン・モデルと呼ばれる事態認知モデルでは、参与者間のエネルギーの伝播という形で、この事態の分析・文法記述が行なわれる (Langacker (1990) など参照)。このアクション・チェーン・モデルに基づいて、谷口 (2005) は、まず2つの参与者から成立している他動的關係 (transitive relation) のプロトタイプを(9)のように表示している。

(9)



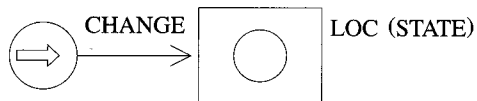
これはつまり、Agent から Mover/Patient にエネルギーが伝達され、その結果として Mover/Patient の位置的・状態的变化が生ずるという事態認知を表している。また、単一の参与者から成立している自動的關係 (thematic relation) の場合は、(10) のように表示される。

(10)

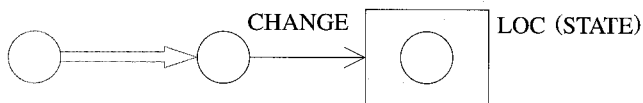


つまり自動的關係は、他動的關係の CAUSE-CHANGE-LOC (STATE) の3分節のうちから CAUSE の分節を除いた事態を表すものであるが、その参与者の変化を引き起こしているエネルギーがどこから与えられるかによって、更に二分される。1つは、参与者がそれ自体に備わっている内在的なエネルギーによって変化を起こす Self-induced thematic relation (S-thematic relation) であり、これは非能格動詞のプロトタイプに対応する。もう1つは、他の参与者からの外在的なエネルギーを受けて変化する Externally-driven thematic relation (E-thematic relation) であり、これは非対格動詞のプロトタイプに対応するものである。

(11) a. S-thematic relation



b. E-thematic relation



この E-thematic relation のアクション・チェーンの表示において、変化を引き起こす原因としての外在的なエネルギーは点線で示されており、つまり背景化されている。この点線部分が状況によりプロファイルされることになれば、他動詞として語彙化されるということになるわけで、多くの非対格動詞が同一形態で他動詞の機能を併せ持つという事実も、この点から説明されることになる。

S-thematic relation と E-thematic relation はそれぞれ、非能格動詞と非対格動詞のプロト

タイプに対応しているが、それぞれに幾つかの方向の拡張が生ずる。谷口(2005)では、非能格動詞に対応する S-thematic relation からはわずか2つの方向の拡張があるだけなのに対して、³⁾ 非対格動詞に対応する E-thematic relation からは、もっと複雑な拡張関係が生ずると分析されている。谷口は、E-thematic relation の中心的事例を(12a)のような単一の参加者の位置的变化を表すものとし、そこから空間化メタファーによって(12b)のような単一の参加者の状態変化を表すものが拡張されると分析している。

- (12) a. The boat sank into the lake.
b. The glass broke.

この2つの事例における非対格動詞には、同一形態で他動詞の機能を併せ持つという点で、共通性がある。更に(12a)のような単一の参加者の位置的变化を表すものから、メトニミーなどによって、外在的なエネルギーが全くプロファイルされなかったり(「方向付き移動」)、またその他の部分のプロファイルが失われたり(「出現」や「発生」)、最終的にはアクション・チェーンの最後の分節である「参加者の位置・状態」だけがプロファイルされるというところにまで拡張がなされる(詳しくは、谷口2005:126-34を参照のこと)。これらの事態に現れる非対格動詞は、全て他動詞としての機能を持たないものである。

- (13) a. John arrived on time. (方向付き移動)
b. A ship appeared. (出現)
c. A big earthquake occurred yesterday. (発生)
d. The statue stands in the front of the building. (参加者の位置)

以上のように非対格動詞はプロトタイプのカテゴリーを形成していると谷口は論じているが、ここでは、(12a, b)にみるような中心的事例、あるいはそれに近い、他動詞機能を併せ持つ非対格動詞に絞って考察したい。⁴⁾ E-thematic relation は、他動的関係や非能格動詞のプロトタイプに対応する S-thematic relation と異なり、そのプロファイルの中にエネルギー源を含んでおらず、他の2つの関係ほど自律的ではないと言える。そしてこの E-thematic relation には、外在的エネルギー(CAUSE 節)が含意されているため、状況に応じて他動的関係(transitive relation)にも自動的關係(thematic relation)にも解釈できるという曖昧性がある(谷口2005:259参照)。break を例にとって考えると、他からの働きかけが認知される状況下では他動詞として記号化されるが、例えば、第2節の(5)のように外在的な働きかけを必要としない状況下では、非対格動詞として記号化される。また build のように、働きかけがなければ後続する CHANGE-LOC (STATE) に相当する自動的關係も成立しないような場合には、他動詞としか記号化できず、非対格動詞としての用法は存在しないことになる。ちなみに、普通 build

3) 谷口は、S-thematic relation の中心的事例を、(i) のように Agent が主語になるものとし、(ii) のように非意図的な身体作用を示す例をそこから拡張されたものと捉えている。
(i) She is dancing in the ballroom.
(ii) She sneezed twice.

4) なお、影山(1996)などでは、このような他動詞機能を併せ持つ非対格動詞を能格動詞(ergative verbs)と呼び、それを持たない自動詞用法だけの非対格動詞とは区別する必要があるとされている。

は他動詞の例として挙げられるが,⁵⁾ 次の例にみるように非対格動詞としての用法も存在しないわけではない。実際に非対格動詞として使えるための条件はかなり厳しいようであるが(寺村 1992:230参照), このように他動詞として理解されていると思われる動詞でも, 非対格動詞に通じる側面をもっているということである。

- (14) Evidence has been building for several years that people who take them to improve their cholesterol levels seem less likely than usual to get cancer. [*The Daily Yomiuri*:2004/06/15:14]

また, 外在的なエネルギーへの依存度が減り, 逆に CHANGE-LOC (STATE) に相当する自動的關係の部分の自律性が高まると, 今度は非能格動詞に近くなる場合がでてくる。その例が grow である(谷口2005:148-50参照)。Levin and Rappaport Hovav (1995) などでは, way 構文で容認される自動詞は非能格動詞のみであり, 非対格動詞は容認されないと議論されている(他に Marantz 1992, Jackendoff 1992, Goldberg 1995 など参照)。しかし, 高見・久野2002 などでも指摘されているように, grow は, この非能格動詞に特徴的な way 構文に現れることができる(下の例文は, 高見・久野 2002 に引用されている Wall Street Journal 1987 corpus, Collins database からのもの)。

- (15) a. Treasury Secretary-designate Nicholas Brady expressed optimism that the U.S. is growing its way out of its trade and budget deficits.
 b. They argue that the country has demonstrated its potential to grow its way out of the debt problem.

この事実は, 谷口も述べているように, grow には非能格動詞に通じる側面があり, 結局 grow はプロトタイプ的な非対格動詞ではないことを示している。非対格動詞のプロトタイプというのは, 潜在的に CAUSE の分節を含みつつ, CHANGE-LOC (STATE) に相当する自動的關係の部分の自律性が高すぎない, ということになるだろう。break と grow は同じく他動詞用法を併せ持つ非対格動詞に分類されても, そのプロトタイプ性に関しては, やはりかなり異なっているとみなければならない。

第2節で, 日本語では英語と比較して自動表現が好まれるということについて触れたが, この点に関して谷口(2005)は, 自動的關係の自律性は言語ごとに異なり, 日本語は自動的關係の自律性が高く, 自動的關係を記号化する自動詞が優勢に用いられるのに対して, 英語は自動的關係の自律性が低く, 他動的關係を記号化する他動詞が優勢に用いられると論じている。日本語においていかに自動表現が重要であるかは, ヤコブセン(1989:234-5)が指摘している通り, 以下にみるように日本語の自動詞には英語にそのまま対応するものがないという事実にも表れている。

5) 例えば, 第2節でみた Hirakawa (1997) の(5)にみるような誘導的表出タスクの実験でも, build は他動詞の例として実験がなされている。実験の結果では, 17%もの日本人英語学習者が, build を cut などの他の他動詞とともに誤って非対格動詞として表出している。そこでは個々の動詞についての具体的なデータは示されていないので, はっきりしたことは言えないが, このような誤りを誘発する要因として, build などの幾つかの他動詞が実際に持っているこのような非対格動詞的な側面とも少しは関係があるのかもしれない。

- | | |
|----------------|---------------------|
| (16) a. 切れる・切る | be cut / cut |
| b. 見つかる・見つける | be found / find |
| c. 助かる・助ける | be helped / help |
| d. 決まる・決める | be decided / decide |

「こわれる・こわす」「育つ・育てる」の場合には、英語に対応する語彙化された自動詞（非対格動詞）break, grow が存在する。

- | | |
|------------------|---------------|
| (17) a. こわれる・こわす | break / break |
| b. 育つ・育てる | grow / grow |

(16), つまり英語において対応する自動詞が語彙化されていない場合と(17), つまり英語において対応する自動詞が語彙化されている場合との間の違いは, それらが表している事態の自動的關係の自律性の高さにある。(17)と比較して, 外部からの働きかけがなければ自動的關係が成立しにくい(16)のような事態では, 英語では自動詞, つまり非対格動詞として語彙化されにくいと考えられる。(17)の中でも, bで表されるような事態は, 既にみたように自動的關係の自律性は高い。それに比較して, aで表されるような事態は, 自動的關係の自律性はかなり低いと言えよう。もし, 第2節でみたように日本人英語学習者が break を他動詞として解釈する傾向があるとすれば, その理由は, その自動的關係の自律性の低さの故に「こわれる・こわす」に対応する英語を, 例えば「切れる・切る be cut / cut」のパターンに引きずられて, 「be broken / break」と習得してしまっているからではないかと思われる。同じ非対格動詞であっても, grow の場合は, 自動的關係の自律性が高い故に, 自動詞（非対格動詞）としての解釈が受け入れやすいのであろう。そのような事情が, 第2節の(5)にみるような Hirakawa (1997) の誘導的表出タスクの実験結果に反映されているように思われるのである。

ところで, 確かに日本語の方に自動表現が非常に多いということは間違いないのであるが, 逆に日本語において, 英語の自動詞（非対格動詞）に対応する自動詞が語彙化されていないようなパターンが若干存在する。その1つの例として, 次のような他動詞用法で用いられる「～する」というサ変動詞がある。⁶⁾

- | |
|--------------|
| (18) a. 検査する |
| b. 形成する |
| c. 翻訳する |

6) もちろん, この「～する」というサ変動詞は, 他動詞としてだけ機能するわけではない。意味的な要因に従って, 自動詞のみのもの, 他動詞のみのもの, 自他両用のものに別れる (詳しくは影山 1996:202-4, 及びそこで引用されている文献を参照)。影山 (1996) から具体例を幾つか引用する。

(i) 自動詞のみ

(事故が) 発生する, (地価が) 下落する, (火薬が) 爆発する

(ii) 他動詞のみ

(ビルを) 爆破する, (通行人を) 殺害する, (家を) 新築する

(iii) 自他両用

拡大する, 縮小する, 変形する

これらの日本語の他動詞に対しては、むしろ英語の方に自動詞（非対格動詞）が語彙化されている。例えば、「検査する」に対して、第1節の(3a)でみたように test は、他動詞としての用法以外に非対格動詞としての用法も併せ持っている。

(19) (= (3a))

In February last year, the mother tested positively for AIDS and was advised notto become pregnant, according to the officials. [*The Daily Yomiuri* :1987/08/19:08]

このような日本語には存在しない英語の自動表現の場合には、その対応する受動表現との微妙な意味の違いなど、日本人の英語学習者にとっては習得上困難な問題が、特に多いように思われる。

以上みてきたように、日英ではその事態解釈に大きな相違があり、日本語では自動表現が好まれ、逆に英語では他動表現が好まれる。更にそれは、両言語の個々の動詞の語彙化のパターンにも反映されている。そしてそのような相違が、日本人が英語を学習しようとする際に、特に非対格動詞の統語的・意味的特徴の習得の難しさという形で現れているのではないかと思われるのである。

4. おわりに

日本人の英語学習者が break を専ら他動詞として解釈しているのではないかということに関しては、Tomita (1999) の実験による裏づけがある。Tomita は、福島大学の104人の日本人大学生を被験者として、能格動詞（他動詞としての機能を併せ持つ非対格動詞）、（他動詞としての機能を持たない）非対格動詞、非能格動詞の3種類の動詞についてその統語的特徴を正しく理解しているかどうかを調査する文法性判断テストを行なっている。全部で24種類の動詞について実験がなされており、全般的に能格動詞の統語的特徴についての習得度が最も低かったのであるが、特に break の場合は、他動詞としてはほぼ正確に理解されているのであるが（正答率92.71%）、自動詞としてはほとんど理解されていないという結果だった（正答率9.38%）。⁷⁾つまりこの実験結果は、被験者たちが break をほとんど専ら他動詞として理解していることを示しているわけである。この実験結果はもちろん、第2節でみた Hirakawa (1997) の誘導的表出タスクに基づいた実験の結果とも一致している。その実験でも、日本人の被験者が、break を非対格動詞ではなく他動詞として理解しており、誤って受動態の形で表出していた。しかし、Hirakawa のもう一方の結果構文を用いた文法性判断テストでは、日本人英語学習者も、ほぼ英語母語話者同様に、正しく非対格動詞（Tomita1999の能格動詞）の統語構造を理解していることを示していると結論されていた。ただ注意すべきことは、この時には、break ではなく grow という非対格動詞の典型的な事例とは言えない動詞で実験が行なわれているということである。そこで筆者は、岩手大学の日本人大学生48人を対象にして、Hirakawa

7) 具体的には、Tomita (1999) は、被験者に対して次のような文の文法性判断を求めることによって、各動詞の自他の習得状況を調査している。

- (i) John broke the vase.
- (ii) The vase broke easily.

の(4)とほぼ同じような実験を行なった。ただ今回の実験では、更に次のような例文も加え、break と grow の非対格性の習得について差があるかどうかを確認してみた。

② John accidentally hit a vase on the table and it fell to the floor with a crash The vase broke into pieces. - 1 0 1 2

48人の被験者が下した判断の平均は、非能格動詞の場合は -1.44, 非対格動詞 (break) の場合は 0.49, 非対格動詞 (grow) の場合は -0.03, 他動詞の場合は, 0.24であった。全体的にあまり非対格動詞の習得状況はよくないと言えるが、それでも非能格動詞との違いははっきり理解していると思われ、ほぼ Hirakawa が示した実験結果を支持するような実験結果とみていいであろう。つまり、break と grow は同じように (というより break の方がもっと) 非対格動詞として習得されているということをこの実験結果は示している。しかし、同じ被験者に対して、今度は②のテスト文から結果節だけを除いた文 (The vase broke.) を提示し文法性判断を求めたところ、奇妙なことに点数は非常に悪くなり、平均は -1.09であった。この結果は Tomita の実験結果と一致するものであり、やはり break は他動詞として理解されているということを示している。以上のような、一見したところ相矛盾しているように見える実験結果をどう解釈するかは、今後の研究に委ねなければならないが、いずれにせよ、結果構文を用いた文法性判断テストが非対格性の習得状況をどの程度正確に示しているのかということに対しては、多少疑問が感じられる。もう少しテストの種類や数を増やす必要があるだろうし、何よりも、break や grow など個々の非対格動詞のプロトタイプ性というものを配慮したテストの工夫が、今後望まれるところではないだろうか。非対格動詞のように、個々の語彙項目の間でカテゴリー帰属性に大きな違いがあり、大きな特徴の差がみられる場合には、その必要性は特に大きいように思われる。

参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Balcom, P. (1997) Why Is This Happened? Passive Morphology and Unaccusativity. *Second Language Research* 13: 1-9.
- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hirakawa, M. (1997) On the Unaccusative/Unergative Distinction in SLA. *Jacet Bulletin* 28: 17-27.
- Jackendoff, R. (1992) Babe Ruth Homered His Way into the Hearts of America. *Syntax and Semantics* 26: 155-78. New York: Academic Press.
- ヤコブセン, ウェスリー (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暁・柴谷方良編『日本語学の新展開』213-48. くろしお出版.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 金田一春彦 (2002) 『日本語を反省してみませんか』角川 one テーマ21.
- Langacker, R. (1990) Settings, Participants, and Grammatical Relations. *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsohatzidis, 213-38. London: Routledge.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Uaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass: MIT Press.

- Marantz, A. (1992) *The Way-Construction and the Semantics of Direct Arguments in English: A Reply to Jackendoff*. *Syntax and Semantics* 26: 155-78. New York: Academic Press.
- 松林城弘 (2002) 「第2言語習得における非対格動詞の受身化について」『アルテス リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要) 71: 39-46.
- Permuter, D. (1978) Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 4:157-89.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』研究社.
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1992) 「「ナル」表現と「スル」表現－日英態表現の比較－」『寺村秀夫論文集Ⅱ－言語学・日本語教育編－』213-32. くろしお出版.
- 千葉修司 (1999) 「英語の非対格動詞の第一・第二言語習得」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(3-B)－ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る－』(1999年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告書(3)) 357-96.
- Tomita, Y. (1999) Semantic-Bootstrapping in the Acquisition Process of English Intransitive Verbs by Japanese EFL Learners. 『東北英語教育学会研究紀要』20: 94-112
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』くろしお出版.
- Zobl, H. (1989) Canonical Typological Structures and Ergativity in English L2 Acquisition. *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*, eds. by S.Gass and J. Schachter, 203-21. Cambridge: Cambridge University Press.